

協力して商品PR



松江養護学校の商品をPRする「eno」のメンバー＝松江市浜乃木7丁目、島根県立大

【松江】障害の有無にかかわらず、さまざまな人が協力して企画を実施しようとして、島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）の学生有志が4日、大学でマルシェ（青空市）を開催した。社会福祉法人や養護学校の協力を得て商品販売し、魅力を伝えた。

人間文化学部保育教育学科3年の4人でつくる学生団体「eno（エノ）」が企画した。授業で法人や養護学校の取り組みを知り、一緒に活動して、商品の魅力を伝えたいと考えた。5月から企画を練り、6月19日に団体を結成した。

商品は大判焼きやパンのほか、松江養護学校の生徒が作った皿や布の小物を用意。学生が選び、商品開発の提案もした。マルシェは昼休みの時間帯に開き、開始後10分で売り切れる商品も出るほど好評で、1時間で完売した。皿を購入した4年の大越秋香さん（21）は「養護学校のことを知る機会になる」と話した。

今後、イベントへの出店や定期的な販売を計画し、団体代表の糸原瑞稀さん（21）は「今回初めて話せた人もいるので、交流もしていきたい」と意気込んだ。

（片山皓平）

紙面編集・中村 浩士

島根県立大 水内豊和准教授



インクルーシブ遊具を生かすには、どうしたらいいだろうか。島根県立大人間文化学部の水内豊和准教授（臨床発達心理学）は「遊具さえあればいいと、思考停止になってはいけない。障害があってもなくても楽しく遊び、同じ社会で生きるためにできることを考えてこそ、意義がある」と問題提起する。

水内准教授によると、車いすの通行を妨げる段差や資格取得時の制限、点字や手話による通訳がないことなど、障害のある人には大きく分けて四つの障壁（バリアー）があ

「心理的なバリアー」なくそう

る。このうち、心ない言葉をかけた時、障害者をかばうべき存在と捉えたりする意識などは「心理的なバリアー」とされ、インクルーシブ遊具を使うことは、それを取り除く（バリアフリー）チャンスだという。

遊びの場面では障害の特性によって、例えばブランコの順番を守って並べないなどのトラブルが起きる可能性もある。そこに遊具の趣旨を知らせる看板があれば、相手の背景に思いを巡らせ、取り合いではなく、自然に譲ることができるかもしれない。みんなが順番を守るルールを考えることもできる。

実際の、万葉公園には「相手の気持ちを考えるのが苦手な子がいまいます」と、特性を伝える看板が遊具の近くに立つ。利用者にさまざまな人が集う場所だという認識があれば、

順番を守るのが難しいという現象も、障害のある子の「困り感」として伝わり、理解を促すことになる。

設置者が数字を書いた椅子を置いて順番を分かりやすくしたり、地面を色で区分けして待合スペースを設けたりと、より使いやすくなる工夫を付け加えることもいい。

このほか、排せつや体温調節に困難がある子が快適に利用するには、多目的トイレや横になっておむつ交換できるベッド、水分補給に便利な自動販売機が近くにあることなど当事者目線の環境整備も求められる。

水内准教授は「心理的なバリアーをなくし、社会が寛容にならないと十分に機能しない。つくっておしまいでなく、自分ごとで捉えることが大切」と話す。

歌や踊りを楽しむ

【松江】子どもたちに音楽の素晴らしさを伝えようと、島根県立大の学生が企画したコンサートが17日、松江市白潟本町の市民活動センターであり、来場者約80人が一緒に歌ったり踊ったりして楽しんだ。

地域貢献活動として大学の助成を受け実施。短期大学部保育学科の音楽研究室の学生10人が構成や演出を考えた。2部制のコンサートで、前半は学生が歌って踊り、童謡「どんな色がすき」では、子どもたちに聞いた好きな色を歌詞に乗せてみんなで歌い、正面のスクリーンに虹を描いた。

後半は21年に同大学を卒業し、今年から松江市内で保育士をしている松浦遥さん(22)がピアノ演奏を披露。参加者は繊細な音色に聞き入った。最後は松浦さんから卒業生が作詞作曲した「みんなの詩」を出演者全員で歌い、会場は盛大な拍手



手遊び歌を披露する島根県立大学短期大学部の学生＝松江市白潟本町、市民活動センター

で包まれた。

コンサートを楽しんだ松江市浜乃木3丁目の渡部日菜ちゃん(5)は「一緒に歌って楽しかった」と喜んだ。司会などを担当した音楽研究室2年の荒川望咲さん(19)は「子どもたちが楽しんでいるのを見て、自分たちも楽しめた」と話した。

(小引久実)

学生の夢企画審査

【松江】松江市浜乃木7丁目、島根県立大松江キャンパスの学生が考案した事業を支援する「キラキラドリームプロジェクト」



読み書き支援を発表する内田和花さん（左）と芦田心咲さん＝松江市浜乃木7丁目、島根県立大学松江キャンパス

エクト」の公開審査会がこのほど、学内であり、人権を考える活動と学習障害支援の2団体の提案が選ばれた。

学生の自主性や企画力の向上を目的に毎年、実施する。5団体が発表し、審査で2件を選んだ。

保育教育学科4年の大森真琴さん(21)ら「チーム島根発信隊」の3人は、浜田市の島根あさひ社会復帰促進センターを舞台にした映画「プリズン・サークル」の上映会を企画。人権を考えるきっかけにしたいと発表した。

また、読み書きの学習に支援が必要な子どもをサポートする「ひまわりサークル」メンバーで同科2年の内田和花さん(19)ら2人は情報通信技術を利用した支援の方法を検討。島根県の特別支援教育を充実させたいと伝えた。選ばれた2件に経費を助成する。

(坂上晴香)

私の研究



〔9〕

「詩創作」指導の研究を専門とする。詩の創作は10年ほど前に学校の教科書に取り入れられたが、苦手意識を持つ人が多い。教師、生徒双方が創作を楽しめる機会を増やそうと日々研究を重ねる。

「詩」に興味を持ったのは大学時代に出合った英国の本がきっかけ。言葉遊びや比喻表現など、言葉に関するアイデアが詰まっており、とりこになった。英国では1960年代から詩の創作が活発に授業で展開されて

中井 悠加さん (島根県立大准教授)



詩の創作楽しむ輪を広げる

いた。卒業論文も博士課程も「英国の詩創作指導」を研究。学習指導要領で詩や物語、短歌などの創作が求められるようになったタイミングと重なった。日本の詩創作は自分の素直な

思いや心の動きを記す指導が基本で、それが詩作の気恥ずかしさにつながっていると感じている。一方、英国の指導では、決まった枠組みや方法から言葉を選ぶことができ、発想が広がり

やすいという。例えば「素材」と「物質」の単語を何種類ずつか紙に書いて袋に入れ、引いたもの同士をくっつけ発想させる。素材から「砂」、物質から「新幹線」を

博士課程ではワークショップの大切さを学んだ。英国では創作教育に関心がある人たちが親しむ1週間泊まり込みのワークショップがある。自身も参加し、詩の創作と朗読をメンバーと毎日繰り返すと抵抗感は消え、褒められると自信になった。教え

る側も創作と共有を体験する必要性を感じた。島根県立大に移ってからは、詩創作のアプリ開発に力を入れている。あらかじめ収録された新聞や雑誌の文章から、自由に言葉を選び、それらを組み合わせ、詩を作れる。詩の素材選

引いたとすると、「砂の新幹線」という現実にはない物が表れる。自分の枠組みにとらわれず、なかい・ゆか 1985年、広島県生まれ。神戸大発達科学部を卒業し、広島大大学院教育学研究科博士課程(教育学)を2013年に修了。広島大大学院教育学研究科助教、島根県立大短期大学部講師などを経て21年から県立大人間文化学部保育教育学科の准教授。

表現が豊かになり言葉が思い浮かびやすくなる。「イギリスのよな『言葉遊び』を楽しむ詩創作を日本の授業に取り入れた」と考えている。

を助ける仕組みだ。作品を見合う機能もある。アプリを使って英語圏の人々とも作品を共有し、発見や学び合いができる環境をつくるのが理想だ。もちろん学校での利用も想定しており、2年前にあった国語教育の全国大会ではアプリについて説明。年内には国内の中学校に紹介する予定もある。研究し始めた当初は外国の詩創作指導方法の意義が伝わりづらく、ワークショップを受けたこともあったが、当時と比べて詩創作の重要性が少しずつ高まっている実感がある。「アプリを通して継続的に学ぶ方法を考えながら、詩創作を楽しむ人の輪を広げたい」と先を見据える。

(坂上晴香) 隔週金曜掲載